

---

## 巻頭言

小誌が紙版の発行を停止して7、8年が過ぎた。所属する学会でも年報を印刷するのをやめ、電子媒体のみの公開がはじまった。年一回の発行では若い研究者にとって遅過ぎて、公募のための業績としてカウントしにくいことが問題になり、議論の結果、論文が届いたら順次査読に入り、掲載が決まったものをJ-STAGEにアップロードしていくことになった。

その年報の編集委員を務めて数年になるが、年一回の発行だとその業務はいわば季節労働で、ある時期に集中する。それは大変だが、刊行の区切りがある。それに対して新しい編集体制では、編集委員会は一年365日開業状態である。いつ論文が届くかわからないし、届いたら査読者を探し、結果が届けば投稿者に送付……最終的にウェブサイトへアップロードされたことにも気づかない。一年中歩かされているような感じだ。決定的な違いは、編集長や編集委員会が発するメッセージは不要になったこと。つまり雑誌であることをやめたのだ。

『総合文化研究』は電子版になっても雑誌の体裁を残している。研究所のHPからダウンロードすれば、1号全体を通読することができる。毎号特集テーマがあり、今号は丸山空大氏編集のもと「ちいささ、弱さ、おるかさ」をテーマにしている。

昨今、世界中で古い雑誌のデジタル化が進み、それに基づいた雑誌研究も盛んである。あっという間に消えた3号雑誌から数十年続いたものまで、雑誌の終わり方には、資金不足、編集部の内紛、検閲などさまざまな理由がある。

私たちは（確実に）財政難であるが、編集部には内紛はなく、検閲もない。本誌が共同作業でできあがる雑誌である限り、表紙から最終ページまで、この一年の集合的な記憶を形にした一冊として、紙をぱらぱらめくるように読んでいただきたい。

総合文化研究所長 久野量一

